

第5回 ふう太の杜 常田富士男文学賞 講評

第5回 ふう太の杜 常田富士男文学賞には、

第1部 「創作昔ばなし」部門に 二十編

第2部 「手紙」…テーマ「ごはんにまつわる母への手紙」

※母は、家族も可には、一般…十七編、小中学生…六十二編、計九十九編の応募があった。コロナ禍の中、全国から作者の心の思いを織り込んだ作品が寄せられたことに、まず感謝申し上げたい。

受賞作品についての要旨と寸評を述べ、講評に代えたい。

一 第1部 創作昔ばなし 部門

常田富士男賞

「ねつをだしたおっとう」

細江 隆一

岐阜県加茂郡八百津町

昔々あるところに、せいたという男の子がおっとうと二人で住んでいた。おっかあはとうの昔に死んでしまつて二人で暮らしていた。せいたはおっとうに甘え、おっとうも一人っ子のせいたを可愛がつていた。ある日のこと、おっとうが突然熱を出して寝込んでしまった。心配になつたせいたは、隣の家のおばあさんから、一つ山を超えた村にいいお医者さんがいる、しかしその山には「やまんば」がいるということを聞かされた。せいたは恐ろしかったが、おっとうの為に意を決して山道に向かう…。

この辺りまで読み進めると、斉藤隆介の『モチモチの木』を彷彿させるストーリーである。しかし、途中で出会つた「やまんば」がせいたに要求したのは、髪の毛だった。往きに半分、帰りに半分せいたの髪の毛は無くなり、頭はつるんつるんに。でも、髪の毛を代償にお医者さんをおっとうの元に送ることが出

来、おっとうの熱は下がつた。その夜、せいたは夢を見た。「やまんば」と子どもの「やまんば」が出てきた。こどもの「やまんば」の頭には、せいたのふさふさの髪の毛がついていた。

「寸評」

「やまんば」がなぜ髪の毛をせいたから抜き取つたかというところ、つるつる頭の子どもの「やまんば」のためだったという終末である。このモチーフは、今日のヘアードネーション（髪の毛の寄付）にある。SDGs（持続可能な開発のための目標）の観点からすると、③番「すべての人に健康と福祉を」、④番「質の高い教育をみんなに」、⑫番「つくる責任使う責任」、⑬番「パートナーシップで目標を達成しよう」などに関連している。昔ばなしでありながら、今日的な話題に通じる作品となつた。

また、本作品は全部ひらがなで表記されており、小さな子どもでも読み進めることが出来、「語り」としての文学の面からも評価したい。

佳作

「ウソツキ安兵衛の日記」

安沢 幸一

高知県高知市比島町

昔々ある山奥に安兵衛という青年がいた。なぜだか安兵衛は、村人からはひどく嫌われていた。安兵衛の言つたことと反対のことが起こるからだ。例えば「おい！イノシシがそつちの畑を荒らしているぞー！」と叫ぶと、村人が畑に行く前にイノシシは畑からいなくなつてしまうのである。イソツプ物語の「オオカミ少年」のように、安兵衛はウソツキだということになつてしまった。

それならば、日記につけて自分はウソツキでないことを証そうとしたのだが、日記に記したことと反対のことも起こつてしまふ、日記にまでウソを書くのかと、村人から心ない言葉を浴びせられ、安兵衛は家に塞ぎ込んでしまふ。

そんなある日、村長の娘が不治の病にかつた。心優しい安

兵衛は、娘さんが治るように毎日神様にお祈りすると村長に申し出た。ところが村長からは「お前さんのウソは聞きたくない。帰ってくれ」と言われてしまう。そこで、自分の言ったり書いたりしたことと反対のことが起こるなら、【村長の娘は、きつと治らない】と書いたのである。その翌日、安兵衛は米屋で日記を落としてしまう。そして、その文面を米屋の主人に見られ、村長や村人の耳に入ってしまうのである。安兵衛はどうとう村から追い出された。

安兵衛が村から追い出された日から、村長の娘の病は目に見えてよくなっていた。一方、以前に安兵衛が言ったこと（イノシシやクマやサルなどが村の畑を荒らすこと）が次々と起こるようになる。村人達は作物が収穫出来なくなり生活ができなくなってしまう。

冬のある日、村長が安兵衛の家を売り払おうとして、家の中に入ると一冊の日記が置いてあった。村長はその日記を読み、安兵衛の言ったことや書いたことが全部本当の事だと分かった。そしてそのことを村中に伝え、風の便りに聞いた安兵衛の住んでいる村に、手紙と日記を送ったのである。しばらくして安兵衛は村に帰ってきて、ずっと幸せに暮らした。

【寸評】

作品の文体からみると、前半は会話に「べえ」や「べ」の終助詞をつかつての語り口調であるが、後半は説明的に展開するので、語りの文学としての一貫性を齎せたい。

「うそ」をテーマにした、まんが日本昔ばなしでは、「うその名人」（三重県）、「嘘にのる欲」（山口県）などがある。しかし、言ったり書いたりしたことと逆のことが起こるテーマの昔話は、管見ではあるが目や耳にしたことがない。安兵衛が日記に記した【村長の娘は、きつと治らない】は、安兵衛の心の中の願いとはパラドックス的に展開するのであるが、そのことによつて、娘の病が治る。そのストーリーの根底には、東西の昔話の、「金の斧」や「花咲かじいさん」、「舌切り雀」などに共通する、正直者こそが報われるというモチーフが、あるのだと思われる。

なお、第1部では前記の作品の他に「時の神」、「たなばたさまと赤ん坊」、「吾作の櫛」、「ボクの名前」が、入賞候補作品となった。

二 第2部 手紙（一般） テーマ：「ごはんにまつわる母への手紙」※母は家族も可

木島平村長賞

「風呂敷弁当」 福島 千佳 奈良県桜井市

小学校一年生の初めての遠足のお弁当。朝起きると台所には大きな二段弁当が風呂敷に包まれてあった。おむすび六個入った大きなお弁当。「足りない子に分けてあげなさい」と母は満足気。

六年生のお姉ちゃんを手をつないでの遠足。お昼になった。レジャーシートに座り、お弁当を出して、ギョツとした。他の子のお弁当は小さなタッパサイズ。風呂敷に二段弁当の子なんて誰もいない。急に恥ずかしくなって、風呂敷弁当をリュックに戻す。

六年生のお姉ちゃんや先生の「食べないの？大丈夫？」の声にもただただ首を振り、「いらぬ」を繰り返す私。

重くて恥ずかしい弁当を出したお母さんへの怒りと、一生懸命作ってくれたお弁当に手を付けなかった申し訳ない気持ちたちがごちゃ混ぜになって、遠足の帰り道泣いてしまう。

家に帰っての母の対応や、その弁当を食べたのかどうかの記憶の記憶はないが、今なら分かることがある。あのお弁当の重みはお母さんの大きな愛情だったということ。あの日の思い出は宝物だ。

【寸評】

長女である作者の初めての遠足。母にとっても初めての遠足のお弁当作り。お腹をすかせてはなるまいと、心を込めて作った六個のおむすび。しかし、小学校一年生、背丈が前から二番

目の私にとつては、ずっしり重く、恥ずかしい大きな風呂敷弁当であった。六個のおにぎりを通しての母と子の思いの交錯が、大人になった今では、げらげらと笑えるような大切な思い出となった。その母の笑い顔を見て私も涙を流して笑った。母と娘の温かでのぼのとした絆が伝わる作品となった。

なお、作者の福島氏は、第1回ふう太の杜文学賞（2018年）の手紙・テーマ「ふるさととご飯（お米）」において、「生きる力」で銅賞を受賞している。

木島平米ブランド研究会長賞

「山賊風カレーライス」 中島 英三 兵庫県三木市

現在おふくろは、百二歳、施設に入所している。二週間に一度施設に向いて、オンライン面会している。その合間に書いたおふくろへの手紙。

高校二年生のこと。自分の実家は遠方なので、高校の近くに下宿していた。友だちの三人は、そのことが信じられなくて、ある日路線バスで小一時間かけて実家に遊びにきた。

おふくろは農作業で忙しい中、カレーライスを大鍋一杯に作ってくれた。当時の我が家のカレーライスは、サバ缶にジャガイモ、ニンジン、玉ねぎ、ナス、カボチャなどの季節の野菜を乱切りした山賊風のカレーライス。僕たち四人は、色々なことを話しながらかお代わりをして腹一杯食べた。

一人息子の大切な友達のために、何も言わずに一心で作ってくれた山賊風カレーライス。でも、これまでずっと照れくさくて、おふくろにお礼を言っていなかった。今更遅すぎるが、今度の面会の時に「あのときはホントにありがとう」ってお礼を言うよ。また顔を見に行くから元気でいてね。

【寸評】

作者は現在七十二歳。高校二年生は五十五年前、昭和四十二年頃の思い出である。昭和四十二年、大相撲で言えば、大鵬や柏戸が活躍していた時代である。農作業の忙しい中ではある

が、大事な一人息子の大切な友達のために、何も言わずに作ってくれたサバ缶入りの山賊風カレーライスは、友達と会話を交わしながらのおいしいご飯であった。

ちなみに「サバ缶」は、木島平村を含め、雪深い長野県北信地方では、貴重なタンパク源であり、カレーライスの具材としても愛用されていた。そんなこともあり、山賊風のカレーライスには親しみも感じられる。

七十二歳の息子が百二歳のおふくろにお礼の言葉を言う。半世紀以上の母と子の関わりが温かく紡ぎ出されてくる作品となった。

佳作

「ごめんなさい」 山崎 幸子 東京都中野区

昭和三十七年、五歳の私が初めて幼稚園の遠足に行ったときのお弁当の話。ピカピカの赤いアルミの弁当箱に入っていたのは、俵型の海苔巻きおむすびが六個だけ。周りの友達は、花形のゆで卵やタコのウインナをおいしそうにつまんでいた。

私は簡素な自分の弁当を無性に恥ずかしくなり、おむすびを一つ取り出して蓋を閉める。一口食べると、大嫌いな梅干しが顔を覗かせていた。おかずがなくちゃ食べられないとおむすびを弁当箱に戻そうと再度蓋を取った瞬間に、中のおむすびが全部転がり出て、敷物を横切り土の上に着地。「あっ、おむすびころりんだ」と誰かの声。

そこで私は、土にまみれたおむすびを素早く拾い、弁当箱に押し込んで蓋をする。汚れたおむすびを人に見られるのが無性に恥ずかしかったからだ。

半世紀以上も昔のことです。その後のことは覚えていないが、今なら分かることがある。二つ下の弟を背負いながら店の手伝いをして忙しかった貴方が、私のために初めての遠足のおむすびを握ってくれたこと。初夏なので傷まないようにと梅干しを入れてくれたこと。副食までは手が回らなかったこと。土にまみ

れほとんど手つかずのおむすびを見て、心を傷めたこと。

当時は、家にかまどがあり、毎朝火を熾して羽釜でご飯を炊いていた貴方。炊きたてのご飯で握ったおむすびは、今なら贅沢の極みだ。あの日に帰れたなら、私は貴方に謝りたい。ごめんさい。私は見栄っ張りで我が儘な子どもでした。

〔寸評〕

木島平村長賞をとった「風呂敷弁当」と似た題材となった。

ここでも、子どもの初めての遠足でのお弁当をめぐって、親の思いと子どもの願いとが交錯したことが描き出されている。本作では、蓋を取った瞬間におむすびが全部転がり出てしまうという悲劇も起こる。周りの友達のお弁当のおかずと比べ、おむすびだけの簡素な内容を恥じるという子どもなりの精神的動揺もあつたのであろう。

半世紀以上経った今でこそ、当時の母の思いが理解でき、あの日に帰ったら謝りたい。

「ごめんさい、お母さん、貴方の心を込めたおむすびを台無しにして。私は見栄っ張りで我が儘な子どもでした。」と懺悔するのだ。

佳作

「真っ黒こげのご飯」

宮内

瑞穂

千葉県市川市

私が小学校一年生の時に、真っ黒焦げのご飯を炊いたこと、思い出を、（おそらく天国にいる）母に語りかける手紙。

畑の草取りに行くから、ご飯を炊いておいて、と頼まれた私。遊び盛りの私はすぐ不満だったが、嫌だと拒むことが出来ずに、いやいやながらかまどに火を点ける。庭の方では近所の子と弟と妹の遊んでいる声が聞こえてくる。

どうして私ばかり用を言いつけられるのか、お姉ちゃんて損だなと思いつつながら、どんどん枯れ木をかまどに投げ込む。お釜からじゅうじゅう音を立てて米汁が流れ落ちて、それがご飯を炊けたことを意味しているとは知らずに、焦げ臭い匂いが

しても火力を緩めずどんどん木をくべている私。

「何をしちよるんかね。畑までこげた匂いがしてきたので、帰って見たら、ご飯が真っ黒じやないの。これじゃ、食べれん」と、私を叱りとばす母。そのうえ役立たずと罵られて、辛く悲しく泣くしかなかった私。

「瑞穂は決して悪くはない。ご飯の炊き方を知らなかっただけ」と、あの時慰めて欲しかった私。今は炊飯器があり失敗することなくご飯を炊いている。真っ黒焦げのご飯は、母とのなつかしい思い出だ。

〔寸評〕

作者の宮内さんのご年齢は七十六歳。戦後昭和二十一年のお生まれである。炊飯器が世の中に出るのは昭和三十年代だから、小学校一年生の時は、かまどで羽釜を使ってご飯を炊くのが一般的であつた。農家などで忙しい時期には、夕飯を炊く仕事は、子どもに任せられることが多くあつた。

しかし、小学校一年生の作者は、誰からもご飯の炊き方や、「始めチョロチョロ、中パツパツ。赤子泣いても蓋とるな」というご飯炊き用語があることなんかを教えてもらっていなかった。だから、ただかまどに薪をくべるだけの私だった。

焦げ臭い匂いを感じたので、血相を変えて帰ってきた母。お釜の蓋を取り、私を叱りとばす母、その上「役立たず」と罵られる私。私にとって、ごはんにまつわる母との思い出は、辛く悲しいものであつた。

しかし、歳月が流れ、この辛く悲しい思い出があまりにも印象深く、今となつては母を偲ぶ懐かしい思い出となつたのである。

なお、第2部手紙（一般）テーマ：「ごはんにまつわる母への手紙」※母は家族も可では、審査員の間で、「ごはん」をどう扱うか話題になった。一般的には、「①飯の丁寧な言い方。―炊きたてのごはん。②食事の総称。―昼ごはん。―ごはんを誘う。」等の解釈があるが、主催者の願いから、米を使って炊いたごはんをテーマの対象とした。

前出の入賞作品の他に、「拝啓 母上様」、「ごはんにまつわ

る母への手紙」「心細かったおにぎり」「やっぱり」「お好み焼き」が好き」「俺にも弁当を」が入賞作品候補となった。

三 第2部 手紙（小中学生）

タツノコ賞

「お母さんの気遣い」

渡辺 紗雪

長野県山ノ内町立山ノ内中学校

部活動をしている中学三年生の作者。毎日の朝ご飯はおにぎり。それは一回り大きめのサイズ。学校でお腹をすかせないようにと母の気遣いが嬉しい。部活動の大会や練習試合の日は、必ずおにぎりが二つ。一つは朝食用で、もう一つは昼食用。朝食のおにぎりを食べながら現地に向かう。そして嬉しいのは試合後のお弁当。海苔の香りがするおにぎり。今日の食材は何か楽しみにおにぎりをほおぼる。

大会前日の夕食は、母の手作りのカツ丼。少し甘くて濃いめのカツ丼を食べることで、明日の大会への意気込みとなった。

母の食事への気遣いのお陰で、故障もなく健康に過ごせてきた。今まではそれが当たり前だと思っていた。部活動が終わった今、改めて母の作ったご飯に毎日支えられていたことに気づき、ありがたうと感謝する私。

〔寸評〕

母と娘の絆が毎日のご飯を通して深く結ばれている。部活動で忙しく活動している娘の朝食のおにぎり。最高に美味しい状態で食べさせたいという母の気遣いを嬉しく思う作者。朝食だけではない。試合の前日には、絶対勝てるようにとの手作りカツ丼。その味加減にも明日への活力を生み出す工夫がされている。

部活動を終了するまで健康で過ごせて来たことを、あらためて振り返ってみると、母の毎日のご飯への気遣いに支えられていたことに気づく私。それを素直な心で感謝する手紙となった。

ごはんを通して、母と娘の温かい愛情と信頼の心が見事に描き出された作品となった。

佳作

「お母さんの毎日のご飯」

渡辺 みゆ

長野県山ノ内町立山ノ内中学校

この夏に、母が十日間家に居なかつたことがあつた。その間、父と二人で家事分担し、食事はほとんど父が作った。でも時々私が作ったこともあつた。

ある日、私はお昼ご飯に自分の大好きな「オムライス」を作つた。父にも褒められ素直に料理が楽しいと思つた。調子に乗つて、明日の昼ご飯も作ると口にした。しかし、次の日のお昼ご飯。なかなかメニューが決まらない。イライラしてきた時に、母の作っていた毎日の料理を思い浮かべた。すると、どんどんアイディアが浮かんできた。そして、釣り合いのとれた母の料理のすごさにあらためて思いを馳せる。

毎日違った料理を作ることの大変さを実感した私。仕事で疲れていたり口喧嘩したりした時も、私のためにきれいにプレートに盛り付けてくれる。その母の毎日のご飯に、嬉しさを感じる私。部活の大会の日のお弁当にも、母の思いやりの気持ちが伝わってきて、あらためて感謝する私。

〔寸評〕

母が家を空けた十日間に、食事作りの体験を通して、母の毎日のご飯作りに思いを馳せる。母がいつも聞いてくる「ごはんは何がいい？」の言葉に、毎日違った料理を作ることの大変さをあらためて感じる。部活動の大会の時の弁当も皆から褒められ、誇りに思う私。思いを込めて作った母の気持ち伝わってくる。

「お母さんの毎日のご飯」からは、それを食べる家族への思いやりがこもっており、その思いやりに感謝する手紙となった。